

笹川記念保健協力財団 地域啓発活動助成

(西暦) 2019年2月5日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団  
会長 喜多悦子殿

2018年度地域啓発活動助成

活動報告書

標記について、下記の通り活動報告書を添付し提出いたします。

記

活動課題

地域住民に向け、在宅タミフルケアを理解するための研修を5回企画

活動団体名： 山口県訪問看護ステーション協議会 防府支部

活動者（助成申請者）名： 原田典子

## 1、活動の目的

在宅ターミナル(在宅医療)を知り、理解することで在宅ターミナル事例が増える。  
家で看とれてよかったと思える事例を増やす。  
医療費の節減になる。

## 2、活動の内容・実施経過

平成 30 年 5 月より平成 31 年 2 月までの間に防府市 3 回、山口市 2 回 市民公開講座を実施した。

平成 30 年 5 月 20 日 防府市  
平成 30 年 7 月 22 日 防府市  
平成 30 年 9 月 22 日 山口市  
平成 30 年 11 月 18 日 防府市  
平成 31 年 2 月 3 日 山口市

市民向けに解りやすい在宅医療や在宅ターミナルの話を組み立て 2 時間の座学の後関係者と交流する会を設けた。

口座の内容は 2 部構成とした。第 1 部では介護支援専門員の立場から在宅で最期まで過ごしている事例をイメージできるようもし自分や大事な人がガン末期のような治らない病気になる時どのように考えるかを説明。治療と介護を整理して考える事。現存する公的サービスを活用しながら在宅療養ができることを事例を交え説明し、それに伴う費用の話し、高額療養費・介護費、特別障害者手当やおむつ給付制度など様々な公的サービスが存在していることを説明した。また、情報入手の手立てとして各個配布される行政の広報紙に書いているのを見るように意識啓発にも努めた。

また、実際相談する介護支援専門員や病院で相談できる MSW など平素から相談役として存在している人が居ることを知り、意識してどこの事業所のどの人が良く相談に乗ってくれるのかなど個人でも情報を得る工夫をすることも伝えた。

アドバンスケアプランニングの考え方についても説明した。医療と介護両者と共に治療と介護の方針を確認し合う事の大切さ。そして、医療の開始不開始含めどのような治療をどこで受けたいのか、自分で意思表示ができなくなった時に推定意思と言う考え方があることも伝え平素から我がこととして寿命を延ばすだけの治療を望むか、敢えて挿管も人工呼吸もしない、認知症状が悪化した時には経管栄養はしたくないなど家族間でも話し合っておくことが大事である旨を説明した。

第 2 部においては、まず、地域包括ケアシステムの考え方を伝え、現在、そして今後の医療体制の実態を講話。治療は望まないが最期の時を病院で迎えたいので入院したいと希

望しても希望が叶わず、介護施設や自宅で最期を過ごすことになることもあり得ることを説明。また、その反面在宅医療が充実してきていることについても併せて説明するとともに、どこで過ごしたいか本人の希望に応じた場所で過ごせることも説明した。

タブー視されることの多い「死」について敢えて真っ向からテーマに取り上げ「死」を見つめる機会を持つことで「生きる」ことを考える機会とした。

そして、死を迎える間際になると人間は生物としてどのような生体反応、変化をきたすのかを説いた。食事がとれない水分がとれない。弱るので点滴をして欲しい。息が苦しうだから酸素吸入をして欲しい。そんな声をよく聞くが、過度な水分補給により心不全を助長することや、炭酸ガスが溜まり意識がボーっとすることで本人にとっては見た目より苦しさを感じる事が軽くなってくることもあることを話した。病状の変化に合わせその時々で適切な医療内容を相談しながら決定していくことの大事さを話した。

講話後の交流会においては参加者よりいろんな意見がでた。自分の家族が介護を受けているひと、今まで家族と死にそうな具合の悪くなった時のことなど話したことがないが話してみると言われている方もいた。

### 3、活動の成果

聴講された市民は全員研修を自宅ターミナルケアがよく理解でき万が一の時は自宅ターミナルケアをやってみたいと全員感想を述べた。この研修を企画する意味として在宅医療の仕組み制度を理解してもらうことが1つあったこのことに関してもかなりの理解が市民サイドで得られたもう一つの目標として病院でのターミナルがどういうものであるかを知ってもらうことと施設でのターミナルがどういうものかを知ってもらう。かつ、自宅ターミナルがどういうものかを知ってもらうことについても十分に理解を得ることができた。

その結果前述したように聴講者全員が自宅ターミナルをできるのではないかと希望を持って研修を修了し終了することができた。

この研修に参加することでエンディングノートの意味であったり、アドバンスケアプランニングの意味も理解することができ一人ひとりの市民がそのようなツールを使って自分の終末期について書き残すことに大変興味を持つことができた。実践としてできるかどうかは不明であるがこの研修開催の意味は大きくあったと思う。

### 4、今後の課題

今後も地道な活動になるが今回のような情報発信を重ねていくことが大事である。また、社会教育として医療者だけでなく我が事として終末期の医療、療養について考える風潮を作り上げていく活動も併せて必要であると思われる。

## 5、活動の成果等の公表予定（学会・雑誌）

学会等への発表と言う形式は行わないが、講演、講義の機会に今回の活動内容や参加者の反応などを周知する機会があるたびに伝えていくことを続けて行こうと思う。